

野崎さんと私は同じ町内に住んでいる。いわば隣り組なのであるが、最初の出会いは御本人よりも絵の方であった。

1961年、大丸デパートの展覧会に偶然迷いこみ、そこで強烈な印象を受けた。たとえばカンムリズルの金色の冠毛の夢幻的な華麗さとか、クジャクが三羽、誇らかに頭をあげ、尾をひろげる絵の格調の高さ、そしてまたクマタカのがっちり岩をつかんだ脚のあらゆるまでの豪快なタッチに、私は息をのんで立ちつくしていた。

ところで1976年、野崎さんの絵に私が文をつけて、絵本をつくる仕事をさせていただいた。つまり、その時はじめて野崎さんにお目にかかったわけで、紹介して下さったのは、野崎さんの絵のファンである編集者であった。

その時の絵のモチーフは、ハクチョウとオシドリであった。たかだか子供の絵本であったのに、何回も皇居のお濠端にスケッチにいかれ、精魂こめたていねいな仕事ぶりであった。線の一本一本が緊張感を持って、調和のあるフォームをつくっていた。大丸で拝見したカンムリヅルやクジャクの、あの華麗さと、クマタカの重厚さがあり、どの頁からも立ちのぼる気品とあたたかさに、私はますます野崎さんの絵のとりこになってしまった。

野崎さんの絵のモチーフには鳥が多い。野崎さんがハルビンにいらした頃、かがやく教会の屋根をかすめて飛びかう鳥の群れが強く印象に残り、その後たびたび鳥の絵をかきよようになられたと、何かに書いていらしたのをよんだことがあった。

じつは私も鳥が好きで、鳥と子どもの交流をモチーフに子どもの本をかいているのであるが、私の場合、鳥と子どもの観察をそのままストレートに作文したにすぎない。

鳥の絵のこと

岩崎京子
Kyōko Iwasaki



「熊鷹」10F 1976

しかし野崎さんの鳥は、すべて野崎さんの心の目で対象を見、いったん野崎さんの心の中にしまいこまれ、かもされるという芸術的な作業がされている。野崎さんのデフォルメは私にとっては、魔法とも奇蹟とも思える。この場合の魔法とか奇蹟とかは、おとぎばなしに出てくるいいかげんな、都合よく展開するのをいっていない。嘆いて、嘆いて、泣いて、泣いて、願って願って……、その極みに成就されるのが魔法であり、奇蹟だと思う。野崎さんの絵にはそれがある。だから私は、野崎さんのお仕事のプロセスがとても興味があり、よくくいさがるのだが、なかなかかきかせていただけない。

野崎さんは決してつまらないおしゃべりにはなならない。もの静かな方である。よく「文

は人なり」というけれど、絵の場合はどうだろうか。「絵は人なり」も成立するとなると、するどい気魄、重厚な絵と、作者野崎さんが結びつかない。これがあの野崎さんの絵かと、誰でもおどろくようだ。

野崎さんは、芸術観も、世界観も、人生観も絵で語っていただけるのだ。この事は画家にとっての誠実さではなからうか。そこで私は実作者（文であれ、絵であれ）はむやみにしゃべってはいけないのだと教わる。心の中をあれこれ言ってしまうのは無益な発散であり、頭の中のもやもやを整理してしまつたら、もう創造する意義がなくなってしまうのかもしれない。

もうひとつ、私の知りたいことがある。野崎さんの絵は1950年代から60年代にかけて、そして更に70年代へと、絵が微妙に変化しているような気がするが、そのバリエーションのプロセスが、知りたくてたまらないのである。たぶんうかがい知れぬ芸術家の創る苦しみと、創り出した喜び、そしてもうひとつ、かきあげたとたん、不満とかあきなりなさもあるのではなからうか。これはまだきかせていただけないが、それがたえず成長をされ、脱皮され、変化しつつおられる野崎さんの秘密であるように思う。たとえば、「最初拝見したカンムリヅルの絵は、今どこにありますか。そこにいったら拝見できますか」とうかがった時、「どうなっているかわからない」といわれた。野崎さんにとってあの絵はすでに卒業されたのであって、何の執着もない様子に、私はうたれたことがあった。つまり野崎さんにとって、絵は人生を知るでだてであり、神……といういい方がいいなら……真、善、美に到達する手段ではないだろうか。（児童文学者）



野崎貢略歴

- 1916 東京小石川に生まれる。
- 1939 川端画学校に学ぶ。
- 1950 創造美術展に出品。
- 1952 新制作協会展に「稔」「冬」出品。新作家賞受賞。
- 1953 秀作美術展出品（朝日）。
- 1955 新制作協会展に「いばらの春」「たそがれ」を出品。新作家賞受賞。秀作美術展出品（朝日）。今日の新人展（鎌倉近代美術館）出品。
- 1956 新制作協会展に「夜明け」「豊饒」出品。新作家賞受賞。秀作美術展出品（朝日）。
- 1957 秀作美術展出品（朝日）。
- 1958 新制作協会展に「方向」「濁」出品。

新作家賞受賞。

- 1959 中央公論新人展出品。新制作協会会員に推挙される。
- 1960 日本の新世代展出品（国立近代美術館）。みづゑ賞選抜展出品。秀作美術展出品（朝日）
- 1962 秀作美術展出品（朝日）。日本国際美術展に選抜され出品。個展5回。
- 1972 東京セントラル美術館大作展に「かざはな」を出品
- 1974 東京セントラル美術館屏風と大作展に「月秋」を出品現在創画会会員。